

概 述 分 節 統 語 法 (英 語)

—— 外国語教授法の一試論 —— (1)

1984年9月

片 柳 寛

Analytical Syntax for Teaching English

—— a non-native approach (1-12) ——

Kan KATAYANAGI

Abstract

What is given here in Japanese is in the place of the Japanese Abstract that should have accompanied each of the article under the title since 1971 to 1982, belatedly supplied all in one.

The content, however, does more to restate, in a sequence of prescriptive stipulations, what has been discussed in expository details than merely to summarise.

Thus, in Section One is laid out the constitution of the 'simulated English for teaching purpose', article by article, in three chapters: syntax, semantics and vocabulary, of which the first being most fully developed. Section Two will present suggestions on teaching methodology based on the principles so established.

A sample paradigm for idioms and idiomatic expressions is attached toward the end of the Section One, which has not been given in the English text.

概 要

我国の外国語教育における学科目「外国語」、特に「英語¹⁾」の指導の実情に鑑み、教えるべきとされる英語の内容、特にその組成・構造について一定の完結像を固定し、一貫した指示体系の総体としてこれを制定することから始めるべきであるとする教授法理論を提示する。

「教えるべきとする英語」の諸部門のうち自然言語としての英語の音形と、現実の辞書の意味

- 1) ここではいわゆる「英語教育」という用語ないし概念を定義の矛盾として、「外国語教育」と区別する。すなわち、人間教育の基幹である言語教育は、本能学習を中心とする「母語教育」と、後天的かつ意図的な修練である「外国語教育」とをその両輪とすべきものと考え、英語は外国語の典型、標本として選んだのであって、それを教えることがそのまま教育であるとはしない。

とは所与・自明の事項であるとしてここでは触れず、第1部では統語部門を軸にして「教えるべきとする英語」の「仕様」を規定し、意味部門と、語彙部門に言及し、第2部においては本理論に則って行なう教授・指導の原則を建て、実践例を紹介する。

なお本稿をもって拙稿 *Analytical Syntax for Teaching English* (1)―(12)²⁾ の和文梗概に代える。

序

ここにいう分節統語法 (Analytical Syntax) とは現実の英語を未知ではあるが可知的なものとして際限なく観察し、記述し、解明するためのものではなく、学習者に教育上の目的と目標に応じて「教えるべきとする英語」を既知のものとして提示し、了解せしめ、多少なりともそれを言語として経験せしめるために、恣意的に一つの有限、単一かつ一貫した理想模式を設定し、その全体像から部分・段階を割り出し、学習を処方しようとする、いわゆる「理性主義的な立場」に立った教授法理論である。

ここでは英語を(1)与えられた要素とその組合せ規則の、その都度の運用により意味とその表現を生成していく過程、および(2)与えられた表現を規則と要素とに開平し、分岐経路を遡行して意味に到達する過程の両方向を具えた知的活動を「学習」であると考ええる。

従って教育・指導上の黙契として、与えられた規則と要素との範囲内での活動はすべて有効な表現とし、それ以外の表現と弁別・区分する。学習は新らしい規則と要素の導入・付加によって展開し、学習者は自明かつ明示的な既習事項の範囲内での運用・慣熟が飽和すれば次の段階への進行を自動的かつ自発的に予期することになり、蓄積される学習は必要かつ充分で内部的には常に有効である。

とはいえこれを英語として外部的に見ればその学習途次すべての段階で現実の英語に及ばず、あるいはそれから距たることは不可避であり、学習者の自然的な表現欲求をそのまま充たすものではあり得ない。しかし、それは経過的なこととして看過し、最終的には学習者が必要に応じて既習範囲を超えた英語現実に対処する潜在力を獲得する見通しとする。

学習課程 (curriculum) は要素と組合せ、すなわち語彙と統語との両部門に開平された内容を各段階の組合せに固定して、範列 (paradigms) に示して学習せしめる。ここでは「教えるべきとする英語」の内容を一応現行の中学校三年生ないし高等学校一年生に期待されている英語に見合うものとしておく。

第1部では分節統語法による教授・指導法が前提とする英語像の各部門のうち統語部門を一定深度で抜粋・収録した規則・指示の総体として示し、意味部門、語彙部門に最少限の言

2) 『論集』第21集～第32集、1971～1982、広島女学院大学。

及をするとともに、統語関係を表層で明示的にするための符号表記を制定し、演算、操作のために定式化しておく。

このように「教えるべきとする英語」の「仕様」を固定して得る文法は一種の規範文法であり、現実の英語あるいはその文法と意図的に剰離・齟齬する理由はない。それとの一層の近似は規定にさらに下位を導入することによって高められるとする。

これがこのまま記述文法にはならず、学習者に与える文法教科書では勿論ない。要はここに示そうとした考え方、ないしは英語像に準拠した教授法・学習過程などが別段に案出・工夫され、たとえば第2部で紹介するように実施され得るものとする点である。

両部各章ごとに条文風に項目を立て、等深度に展開・記述するが、第1部第1章以外では項目番号小数点以下を省略し、詳細を拙稿上記 *Analytical Syntax for Teaching English—a non-native approach—* (1)~(12)および *Analytical Syntax of English*³⁾ に譲る。

また、個別の項目についての実験、提案などについては『英文学会々報』、(広島女学院大学英文学会) 第24号(1980年)以降各号の筆者の研究グループの諸報告、また『外国語教育の原点——調査と論考』(片柳編) 溪水社、1979年、を参照されたい。

第 1 部

第1章 統語法

1.0 文

1.1 ここでいう英語¹⁾で、特定・個別の意味²⁾(第2章)をなす表現(第2章の1)[注1]は、すべて文(1.2)でなされる。1つの文は有限、すなわち始めと終わりがあり完結している。1つの文はそれに対応する1つの意味のみを表現し、1つの意味は1つの文によってその都度表現される。

[注1] ここで表現とは伝達を予想して用いたすべての、ただしここでは言語—英語—による手段・手続きをいい、その効果は問わない。

1.2 文は構造をもつ、すなわち最少限2項に分節[注1]される。その1つは名詞要索(3.1)であり、他の1つは述語動詞(2.1)とし、両者がこの順序で共起して文が成立する[注2]。

3) 同上 第20集、1970。

1) 「ここでいう英語」とは上記の序でいう「教えるべきとする英語」のことである。

2) この記述は全体として完結し、定義は相互的となり循環する。したがって、すべての事項をここから定義して用いることをせず、適切な後述箇所で行ない、それを()内に示す。ただし初出箇所でゴチック体とする。

この不可欠の名詞要素をその文の**主部**³⁾という。

[注1] 分節 (syllabicate, syllabication) とは全体があり、それがそれ自体にとって有意な2つ以上の部分に自明かつ必然的に分割されること、およびそのようにして得られる単位あるいは部分 (syllable(s)) のこととする。循環的に適用することを予想してあえて「文節」としない。

[注2] 省略、倒置等を含む各種の変形については後述するとおりとする(11.6—12.3)

1.3 単語(第3章の1)のうちその1語のみで文の述語動詞として用いることができるものを**動詞**⁴⁾といい、**語彙目録**(第3章の2)にそれぞれの意味(第2章の3)とともに登録されている⁵⁾。

1.4 文は述語動詞に用いた動詞の種類によって上記2つ以上の分節を持つこともある。文の分節数に上限はない。(文中、述語動詞には下線を施す。)

1.5 動詞は文中で予定される共起必須の**要素**[注1]との関係から、次の2種の二分割によって4種、およびそのうちの1つに変種を認め、計5種とする。対応する文も上記のほかに分節数3ないし4よりなるものを加え次の5種(1.51—1.52)となる[注2]。動詞は**語彙目録**にこの5種にそれぞれの意味[注3]とともに分類され登録されている。

[注1] 文の部分のうち統語法から分節して到達したもので特定しないものの般称である。

[注2] 文はこの5種のいずれかであることで「成立」し、それ以外は「不成立」とする。

[注3] 単語としての動詞それぞれが文中で表現外のどのようなものごとを指示し、代理するかを予定し、それが明記されている。

1.51 動詞は**目的語**(1.53)との共起によって**自動詞**と**他動詞**に二分され、後者のみこれと共起できる。目的語は分節をなし、名詞要素である。

1.52 動詞は**補語**(1.53)との共起によって**完全動詞**と**不完全動詞**とに二分され、後者のみこ

3) 用語としては一般に用いられている「主語」としてもよい。主・述二分割を1次分節と考え、述部を動詞とそれ以下に2次分割して全分節に到るのが通常であるがここではことさらに避けた。統語的には主語ないし主部に超越的な機能を認め得ないからである。

分節を深層と表層を仲介する言語的、心理的事実——現象——として意識化させ、それを4ないし5種に収斂し、操作することに習熟せしめることがこの統語法による教授法の眼目である。

4) これは統語論から品詞論を割り出すための処置である。

5) 上記2)で誌したように、有限閉鎖系内の事項の定義として、このように事例を悉皆列举、命名することとなる。例えば動詞とは、ここでは別途に与える「**語彙目録**」の「**動詞**」の項に登録された**単語群**のことである。

れと共に起しかつ必須である。補語は分節をなし、名詞要素、もしくは**形容詞要素**（4.0）である[注1]。

[注1] 文中で名詞要素が上記の目的語であるか補語であるかは**動詞**によって決定している。

1.6 上記による文の5種を**基本文型**——略して**文型**——といい、分節された各要素の種類とその共起順序を、それぞれの符号を含めて右のように定める(表1)⁶⁾。

表1 文 型				
名 称	動詞の種類	文 型	標 示	
第Ⅰ文型	自・完	\boxed{S} \underline{Vi}		
第Ⅱ文型	自・不	\boxed{S} \underline{Vi} 不	$\left\{ \begin{array}{l} \boxed{C} \\ \diamond \end{array} \right.$	
第Ⅲ文型	他・完	\boxed{S} \underline{Vt}	\boxed{O}	
第Ⅳ文型	他・完	\boxed{S} \underline{Vt}	$\boxed{O_1} \boxed{O_2}$	
第Ⅴ文型	他・不	\boxed{S} \underline{Vt} 不	$\boxed{O} \left\{ \begin{array}{l} \boxed{C} \\ \diamond \end{array} \right.$	α

ただし、 \square は名詞要素（文中では []）
 \diamond は形容詞要素（文中では < >）、Sは主部、Oは目的語、Cは補語、自は自動詞、他は他動詞、完は完全動詞、不は不完全動詞の略。OおよびCを一括して α と示すこともある。
 <範例2.1>

1.7 これらの分節の構成、すなわち上記の各文型にそれぞれ個有の**文脈**（2.4—表3）が定められている。文によるすべての表現はこの文型に対応する5つの文脈のいずれかに収斂される。文脈の内容は動詞にも担わせてある(2.4)。

1.8 上記の分節のほかに、任意に付加[注1]できる要素を分節として認め**副詞要素**（5.0以下）とする。副詞要素は表1における分節間の位置、個数に制限はない[注2][注3]。（副詞要素は文中では（ ）で示す。）

[注1] 付加とは添加（4.3）に対して、関係両項の内容に変化のおこらない**連接**をいう。

[注2] 副詞要素は文の成立にかかわらない。表現のうち上記5文型の構成にかかわる**必須分節**をのぞけば何個かの副詞要素が残る。述語動詞の種類を他の部分・要素から推定することはできるが決定はできない。

[注3] 文型を構成する分節とそれ以外で表現の必要とする副詞分節を文の**直接構成要素**（immediate constituents）あるいは**第1次分節**（primary syllabication, —syllables）という。

1.9 ここで定めた5文型をそのまま無操作の表現すなわち**叙述表現**とし、これらに対して命令、疑問、感嘆の表現は文脈を超え、文の意味を超えた、表現の意図・効果による同義異

6) 学習のためにこれらの符号は標示として表現の一部として扱う。これらにより表現として表層化されていない統語関係が明示的な表現となる。いわば一種の訓点・句読法（parsing）である。

いわゆる「5文型」ないし「動詞型」諸理論が一種の統計的蓋然性、ないしは「文体論」的であるのに対し、ここではそれを条件として文を成立させるとする点が異なる。

形とし、必要な文構造の手続きを変形の一種として範例<1.1>[注1]に示す。

[注1] 範例とは各種の相互に関係する規定を展開した表に示し、表現について関係部分の判定・選定に資するもので、記述に代える場合がある。関係する範例は表7にまとめて示す。

2.0 述語動詞、動詞（助動詞）

2.1 述語動詞は文の必須分節であり、動詞のみの場合と助動詞との結合による場合の2種とする。助動詞は第1系列と第2系列とに二分され、前者は動詞の別種としてそれぞれの一般的な意味[注1]とともに語彙目録に登録されている。後者は単語 *have* を助動詞としたもので、その構成する意味は範例<4.22>に明記されている[注2]。

[注1] ここではいわゆる法助動詞 (modals) であり、それらの意味が十分に特殊化されておらず、これらと変化形で結合する動詞の個別の意味と加算されることを予期している。

[注2] ここで *have* は動詞の *have* と同形異語であり、動詞としての意味——他動詞であることなど——を失い、その変化のみを保留している。

2.2 助動詞と動詞による述語動詞の形式は表2の範例<4.22>で示すとおりとする。文中では必ずしも連接しているとは限らないが、両者は一体として処理する[注1][注2]。（文中では助動詞に下線を施し、語尾に+を付し、結合した動詞——変化形——には破線による下線を施す。）

表2 助 動 詞 構 造

	助 動 詞 + 動 詞 (変化形)	種 類	意 味
第一系列	<u>do/does</u> + 原形 [注1] <u>did</u>	need, dare, etc [注2]	(略)
	<u>may</u> + 原型 <u>might</u>	<u>can</u> , <u>will</u> <u>could</u> , <u>would</u> , etc.	(略)
	<u>?</u> + 不定詞 [注3] <u>used</u>	ought, etc.	
第二系列	<u>have/has</u> + 不定詞 <u>had</u>		義 務
	<u>have/has</u> + 過去分詞 [注4] <u>had</u>		完 了
合併	<u>may</u> + <i>have</i> { + 不定詞 <u>might</u> { + 過去分詞	(略)	(略)

[注1] 「代動詞」といわれ、否定・強調・疑問に用いる。命令可。

[注2] 一般動詞に近い。

[注3] 現在形、疑問形困難。

[注4] 自、他に関係なく完了形をつくる。

<範例4.22>

[注1] 助動詞と結合するときの動詞のいわゆる語形変化は別途に語彙目録の動詞の部で範列<4.21>として上記範列<4.21>中の変化名とともに記入してある。ここで用いてある過去分詞、不定詞の名称については後に(10.4)言及する。

[注2] 第3系列——もしくは合併形—— 第1系列の動詞部に上記 have を一般動詞であるかのように諸変化せしめ——事実上は無変化形 have に限る——て結合し、have みずからは第2系列の助動詞としてさらに動詞と結合した形であり、3単語で述語動詞、1分節となる。

2.3 1語で形成される述語動詞では、その動詞は現在形か過去形かのいずれかであり、そのような文は現在文か過去文かのいずれかである[注1]。助動詞構造によるときもこれに準じ[注2]、いずれもこのことによる語形変化はそれぞれ語彙目録に範列<4.21>として記入されている。

[注1] 現在文と過去文の対立は統語的なものよりは意味ないし表現の問題である。ここでは語彙目録の動詞に共通の事項として、その意味の区別を一括記入しておく。

[注2] 助動詞の現在形・過去形の対立は整合していないまま範列に定めるとおりとし、それらの一般的意味もこれと必ずしも対応しないが、同様に範列<4.22>に明記しておく。

2.4 動詞の意味は上記5種に大別され、それぞれが構成する予定の文脈(表3)を類別、包含[注1]している⁷⁾

[注1] 動詞がそれぞれ予定する直接構成要素間の意味の関連とその完結をいい、明文化して与えられている。

2.5 動詞の下位区分——分類——は語彙目録に示されている。

2.6 動詞の動詞以外の品詞(7.0)への転用はその都度了解[注1]を要し、文中でそれを標示する。また、他の品詞の語を文中で動詞として使うときも同様とする。

表3 文 脈

文 型	表 記
第1文型	S が □ する。
第2文型	S が { $\begin{smallmatrix} \text{C} \\ \text{C} \end{smallmatrix} \}$ と同一であるように □ する。
第3文型	S が O ₁ に効果を及ぼすように □ する。
第4文型	S が O ₁ に効果を及ぼし、かつそれを O ₂ が受容するように □ する。
第5文型	S が O ₁ に効果を及ぼし { $\begin{smallmatrix} \text{C} \\ \text{C} \end{smallmatrix} \}$ と同一であるように □ する。

ただし、表中の符号は次のことを示す。

- S は主部である名詞分節の意味する事物一般
- O は目的語である名詞分節の意味する事物一般
- O₁ は第1目的語である名詞分節の意味する事物一般
- O₂ は第2目的語である名詞分節の意味する事物一般
- C は補語である名詞分節の意味する事物一般
- $\begin{smallmatrix} \text{C} \\ \text{C} \end{smallmatrix}$ は補語である形容詞分節の意味する事態一般
- は動詞の個別の意味

<範例2.1>

7) ここでは文の意味の源泉を上記文脈のほかに動詞にも与えている。すなわち動詞の意味(1.5)をたとえば「主語が(目的語に対し)(補語との間に)□する」と定めてあり、□の中を各動詞に特定して記述し、必要な説明を施しておく。記述・説明の方法は規定しない——主語が無生物であるべきか否か、また動詞のその他の意味論的な特性たとえば ±stative 等を一貫して指定してもよい。

[注1] ここでいう了解とは表現が伝達されるとき、その都度あらためて文外の事情から表現の一部の用法・意味を確定し、認知すること。

3.0 名詞要素・名詞（代名詞）

3.1 名詞要素とは上記 1.2, 1.51, 1.52, 1.8 などと言及した主部(図中 S), 目的語(図中, O), 補語(図中, C)⁸⁾ のいずれかに位置し機能する分節とする。ただし補語についてはそれが形容詞要素でない場合に限る。

3.2 単語のうち1語で、文の名詞要素となり得るものを**名詞**といい、語彙目録中にそれぞれ個有の意味とともに登録されている。名詞の下位区分は語彙目録が示す。

3.3 名詞には単語としての個有の意味をもたず、一般的な意味[注1]だけをもった**代名詞**⁹⁾を含む。代名詞は文中の他の部分を指示し、代理することもある(11.7)。

[注1] 名詞がその意味として予定する文外の事象・事項を表現内で指示し、代理するのに対し、代名詞は表現の都度その意味する事物をあらためて特定化し了解しなければならない。

3.4 代名詞は語彙目録中では、横断的[注1]に上記助動詞(2.1)などとともに**有限群**(3章の3)の1部として区劃されている。

[注1] 品詞による縦断的な語彙目録の分類のいくつかにまたがっている第2元的な区分となる。

3.5 名詞2語以上の接続をもって1つの名詞要素を構成することが出来るが¹⁰⁾、それはその都度了解を必要とする。(文中ではハイフンなどでつなぐ等の標示をする。)

3.6 文中に引用(11.8)された部分は、内容・形式の如何にかかわらず、その都度名詞要素として処理する。(文中では“ ”などで指示する。)ただし文が引用部に**貫入**[注1]しているときは文体的な表現として引用の標示を無視し、引用としない。

[注1] 貫入とは1つの構造の内部に他の構造の1部のみが含まれ、その他の部分を外部に残していること。(文中で分節の符号がたとえば(<) >になること。)

8) 用語としては「主部」にそって、「目的部」、「補部」はさらには「副部」とすべきところ——(1.2)の注の逆。

9) 一般の名詞が、かなり個別的なものを意味として予定しているのに対して、代名詞の意味は一般的、未特定で、その指示性、代理性だけが予定されていることをいう。

10) 名詞の重量・連接による造語法、2語以上による個有名詞などを予想する。

3.7 2つ以上の各種品詞の組合せによって構成される名詞要素の組成[注1]は範列<3.1>で示す。

[注1] 要素とそれらの構成の形式とをあわせたものをいう。

3.8 名詞要素ないしは名詞の他品詞への転用についてはその都度了解を必要とし、文中にそれを標示する。他品詞の単語等を文中で名詞要素転用する場合も同様とする。(いずれの場合も“ ”などをその標示とする。)

4.0 形容詞要素・形容詞 (限定詞)

4.1 形容詞要素は(1.52)で言及したとおり、文の分節として補語であるもののうち名詞要素でないものとする。

4.2 単語のうち1語で形容詞要素として用いることができるものを**形容詞**といい、それぞれの意味とともに語彙目録に登録されている。形容詞の下位区分は語彙目録で示す。

4.3 形容詞は名詞に**添加**[注1]し、その意味とともに後者の1部として吸収・合体させることができる。これを**形容詞的修飾**[注2]という。(文中[< > []]のように示す。)

[注1] 上記「付加」(1.8)と区別する——「添加」はたとえばこの場合少なくとも両者が併せて1語化されている——こと。

[注2] 「形容詞的修飾」は単語形容詞の場合に準じて他の形容詞的な部分が名詞を修飾する場合にも用いる。

4.4 形容詞的には上記(4.2)の定義にかかわらず文中で補語として分節せず、上記(4.3)の修飾のみを行う**限定詞**[注1]を含める。限定詞は有限群として区分され、それぞれの一般的意味とともに語彙目録に登録されている¹¹⁾。

[注1] いわゆる「代名詞の所有格」は限定詞とする。

4.5 2個以上の各種単語の組合せによって構成される形容詞要素の組成は範列<2.1>に示す。

4.6 形容詞要素ないし形容詞の他品詞への転用についてはその都度了解を要し、文中それ

11) 形容詞の「比較」による語形変化等は統語的なものとせず語彙側の文法として分置する。限定詞の「特定」、「不特定」——「定冠詞」の用法など——も同様に意味の問題とする。

を標示する。他品詞の単語を文中で形容詞に転用する場合も同様とする¹²⁾。

5.0 副詞要素・副詞

5.1 文中に上記 1.6, 1.7 等の指定による[注 1], 述語動詞, 名詞要素——主語, 目的語, 補語——および形容詞要素——補語——以外の分節があればそれを 1.8 により副詞要素とする。

[注 1] 副詞要素は文の成立に関係しない。また文型の決定にも関係しない。その位置, 個数についても制限はない。

5.2 単語のうち 1 語で文中で副詞要素となり得るものを**副詞**といい, 語彙目録に意味とともに登録されている。副詞の 1 部は有限群としてそれぞれの一般的な意味とともに語彙目録に区分されている[注 1]。

[注 1] 副詞は多種・多様な単語の総称であり区分は相対的とならざるを得ないが, 有限群には一般に「比較表現」になじまず, 意味も一般的であるものを一括してある。

5.3 副詞は名詞以外の単語に添加し, 自らの意味とともに後者の 1 部として吸収合体させることができる。これを**副詞的修飾**という[注 1]。

[注 1] 「副詞的修飾」は単語間のみでなく一般化して用いる。また上記 4.3 の形容詞的修飾と一括して**修飾**という¹³⁾。

5.4 文中の副詞が修飾以外に用いられているとき**独立**しているといい, 上記 1.8 にいう第 1 次分節としての副詞要素であるとする¹⁴⁾。ただし両者の弁別は形容詞の場合と異り連続的かつ**不確定**[注 1]であり得るとする。

[注 1] 表現中の事項や部分の意味・用法の可能性が 2 つ以上あり, しかもそのいずれでも文型が成立している場合をいう。そのいずれかを決定するためにはその都度の上記 2.6 のいう「了解」を必要とする。

5.5 副詞要素ないし副詞の他品詞への転用についてはその都度了解を要し, 文中にそれを標示する。他品詞の単語を文中で副詞に転用する場合も同様とする。

5.6 表現として必要であり, 文中で分節されるにもかかわらず, いずれの要素とも指定できないもの[注 1], 分節として独立し得ないにもかかわらず表現上必要とされるものは副詞

12) 各品詞について同文の繰り返しになり, かつ相互的となる。

13) いわゆる修飾機能を形容詞と副詞とに限り, 両者の修飾の相互関係を 4.3 と 5.3 の組合せで固定した。

14) 循環的な定義であり 1.8 の対偶である。

要素として仮りに処理する[注 2]¹⁵⁾。

[注 1] 感嘆詞、挿入部、付加部、その他、たとえば命令表現 (1.9) に付加された「呼び掛けの 2 人称」などは副詞として分節できる。「一語文」も他の要素の省略された部分であるが、還元が自明的に行い難いときは副詞分節として処理できる。いわゆる「分詞構文の主語」も同様とする。

6.0 文法辞、文法詞

6.1 上記助動詞 (2.1, 2.2) と限定詞 (4.4)¹⁶⁾ のように文中独立して分節となり得ず、他の部分に添加されてのみ使われる単語を文法辞といい、これに前置詞と接続詞とを加える。いずれも有限群に区画され、それぞれの一般的意味とともに語彙目録に登録されている。

6.2 前置詞は名詞および名詞要素の形式を具えた部分——以下名詞的なものをいう[注 1]——の前頭に添加し後者と合体して形容詞的なもの、もしくは副詞的なものを構成する。これらの合体した構成物を前置詞句という[注 2]。

[注 1] 上記 4.1 で形容詞要素を「文の補語となるもの」と定義したため、文中での用法にかかわらず素材としての語群にこのように品詞名を冠してその性質・用法を示す。「形容詞的」、「副詞的」というのも同様とする。

[注 2] これにより前置詞は二重に接続しては使えない。

6.21 前置詞に後続すべき名詞的な部分が省略され、あるいは倒置 (11.6) [注 1] されることなどがあるがいずれも前置詞句として処理する[注 2]。

[注 1] いわゆる「語順」がその都度の現象として変動していること。

[注 2] 前置詞句に復元することが不可能な保留された前置詞は 5.6 により 副詞的なものとなる¹⁷⁾。

6.22 前置詞句は重層[注 1]出来るが相互に貫入しない。

[注 1] ある構造の内部にそれと同じ構造をもつもう 1 つの構造が完結した形で含まれていること。(文中では符号が (()), < < > >, [[]] などのようになる。)

6.3 接続詞は等位接続詞と従属接続詞の 2 種とし、それぞれの一般的な意味とともに語彙目録中有限群に登録されている。

15) これによりあらゆる有効な表現は文として残すところなく分節されることとなる。

16) 用語としては「助動辞」「限定辞」というべきところ。同様に「前置辞」「接続辞」とすべきであろうか。

17) いわゆる「前置詞付きの関係詞」、自動詞の不定詞句による名詞修飾の場合、自動詞と前置詞の連接が、便宜的に結合して他動詞とされ、さらに「偽似受動形」というべき用法などを予想している。

6.31 等位接続詞は文中2つの部分を同種のものとして一括する記号とし、両者の間に置く。また本来独立すべき2つ以上の文の便宜的な結合を示し、あるいは文頭に付加して先行した表現との関連を示す。後者は分節の指定ができないが5.6によって副詞要素とする(11.2)。

6.32 従属接続詞は文中に、文の形式を具えた部分を重層的に包含するために後者の前頭に添加する記号である。このように文中で1単語相当の部分となる文の形を具えた、いわば「文中文」を従属節(9.0以下)という。このようなことが文中でさらに重層することは認めるが貫入することはない。

6.33 従属接続詞は省略されることがあるが、必ず明示的に復元される。従属接続詞の1部は疑問詞、関係詞(6.4以下)と同形であり、文中での弁別が不確定のことがあり得る¹⁸⁾。

6.4 語彙目録に文法詞という項目をもうけ、疑問詞、関係詞を加える[注1]。いずれも有限群としてその一般的意味とともに横断的に区画され登録されている。

[注1] 「代名詞」(3.4)も「文法詞」と考えていいこととする。

6.5 疑問詞、関係詞は代名詞(3.4)と同様に表現中で了解されればその都度一般的意味に対応する個別的な意味を明示的に示すことができる¹⁹⁾。

6.51 疑問詞は疑問表現(1.9)において未知の事項を仮りに文中でその相当位置に指示・代理させておく符号とし、原則としてその事項が了解された場合にそれを表現する予定の要素と同一の品詞とする[注1]。

[注1] 応答文——疑問表現に対して応答する表現が文でなされているもの——との間に厳密な形式上の対応が成立しないこともある²⁰⁾。(表6 PART II 5.1)

6.52 関係詞は従属接続詞の一種でもありつつ自らの導入する節の構成要素、あるいはその一部を兼ねる[注1]。その品詞指定は後者のそれと原則的に一致するが、その節の品詞指定

18) 英語ないし言語そのものの不備であり、表現の都度了解を要することである。

19) 疑問詞の場合は応答表現で充たされるべき事項の品詞指定などがあらかじめ予想され、了解されることが、関係詞の場合は先行詞などで明示されていることをいう。

20) この統語法が文の内部についてのものであるとする以上、疑問文に関する規定を応答文との対応を根拠にすることは一つの矛盾であるが、疑問表現ということの本質から許されよう。

とは必ずしも一致しない[注2]。

[注1] 部分的な「貫入」といえる。いわゆる関係代名詞、関係副詞などを含む。（文中の符号による標示は関係詞で重なり合うこととなる。）場合によって従属節内では本来の位置からその前頭に倒置される。（文中、その本来の位置を☒で示す。）

[注2] たとえば、いわゆる「関係副詞」は節中の副詞ではあるが、副詞的な意味をもつ先行詞に対する形容詞節を導く。また、いわゆる譲歩・強調の副詞節を導く関係詞はしばしば接尾詞-everを伴った節中の名詞要素である。

6.6 疑問詞は一部感嘆詞にも用いられる¹⁹⁾。感嘆詞は語彙目録に一般的な意味[注1]とともに登録されている。

[注1] 感嘆詞の意味は感嘆の感情、種類、程度、場面など表現上の意味とし、それぞれの語に特に意味はないとする。ただし疑問詞と同形のものは疑問詞の意味を含む。

6.7 感嘆詞が表現の中で独立し、文に付加されているときは分節として5.6により副詞要素として処理する。感嘆詞のみの表現はその副詞要素以外が省略された文として処理する²¹⁾。

7.0 単語、品詞

7.1 すでになされた言及——動詞-1.3, 助動詞-2.1, 代名詞-3.3, 形容詞-4.2, 限定詞-4.4, 副詞-5.2, 文法辞（前置詞, 接続詞）-6.1, 文法詞（疑問詞, 関係詞）-6.4, 感嘆詞-6.6——から単語の語彙目録上の分類を右に示す（表4）。語彙目録は縦断的には品詞別、横断的には有限群と無限群に分極[注1]してある。境界が連続的な場合を破線で示す。
[注1] 分極とは2分割が非連続的に行なえず、いずれの方向にも程度としてのみ表現する場合をいう。

7.2 これらの単語の分類——縦断的な分割——に用いた項目名を品詞といい、各単語はその品詞に属しあるいはその品詞であるという。またこの品詞名を各層の構造に準用し

表4 語彙目録原図

		品 詞 別 分 類								
有 限 群	助動詞	自 他	不完全動詞	副詞（感嘆詞）	限定詞（代名詞所有格）	代名詞	文法詞		文法辭	
							疑問詞	關係詞	接続詞	前置詞
無 限 群			完全動詞		形容詞	名詞				

（續列4.1）

<範列4.1>

21) 文の形態をそなえたもので意味が慣用的(12.4)に感嘆詞に相当するもの、たまたま文として成立しているものが感動・感嘆を伴って表現された感嘆表現とは区別する。

て、例えば、名詞句、名詞節、名詞要素、名詞的部分などという。

7.3 単語そのものの音形についての記述はここでは所与・自明なこととして、取りあげない。

8.0 句

8.1 2個以上の単語が範例<4.1>で示されたいずれかの組成をもっているとき、文中で1個の単語と同等に扱い句という。句の種類は名詞句、形容詞句、副詞句のいずれかとする[注1]。助動詞と動詞との結合を動詞句ということもある。

[注1] 「前置詞句」(6.2)は文中「形容詞句」か「副詞句」かとなり、ここでいう3種の「句」の1つとはしない。

8.2 句は重層することはあるが相互に貫入することはない。

8.3 句は範列<3.1>(表8)に示すように横断的に統語句と文法句に2分される。

8.31 統語句とはそれを構成する単語それぞれの——重層しているときは句の——品詞(7.2)とその句自体の文中での品詞指定とが無関係なものをいう。

8.32 文法句とはそれを構成する単語が——重層している場合は句が——修飾関係(5.3)で結合し、特にその最終被修飾語の品詞と句自体の品詞とが同一のものをいう。

8.4 句と他の構造——単語、節(9.0)、準動詞構造(10.0)——との間の修飾関係は範列<3.2>に示す。

9.0 従属節、節

9.1 従属節(6.32)の組成は範列<2.22>で示すとおりとし、名詞節、形容詞節、副詞節の3種とする[注1]。

[注1] 表現により文中の従属節の品詞指定が不確定なこと、両義的なこと——意図的にも——はあり得る。

9.2 従属節に対してそれを最終的に包含する文を主節という。ただし重層しているときは相対的に上位の従属節のことをいうこともある。

9.3 主節も従属節に貫入できない。句と従属節とは文中で共起し、一方が他方の一部になること——包含されること——はあり得る[注1]。

[注1] 句が従属節を包含することもある。

9.4 等位接続詞(6.31)によって便宜的に文を接続した表現ではそれらの文を等位節という。従属節、等位節、主節のいずれにかかわらず、このように文の組成を具えた語群を節ということもある[注1]。

[注1] 結果的に1つの「文」は独立した「節」である。

10.0 準動詞構造

10.1 動詞に一定の変化を加え、しかも動詞のときと同様必須の後続部 α (1.6) や任意の副詞要素—— β ——を伴ったまま一括して単語と同様に扱うことができる。このような組成をした部分を準動詞構造——あるいは準動詞句[注1]——といい、その品詞は名詞、形容詞、副詞のいずれかである。表現によって文中の品詞指定が不確定、二義的——意図的にも——なこともある。

[注1] 一種の「統語句」(8.31)であるとする。

表5-1 準動詞構造の種類と品詞

10.2 準動詞構造は上記8.3の句、9.2の節と同様に重層はするが他の構造の貫入はない。準動詞構造は一般に他から単語としての修飾はうけない[注1]。

[注1] 準動詞句構造の否定形は他の統語句と同様一般に副詞 *not* を前頭におく。

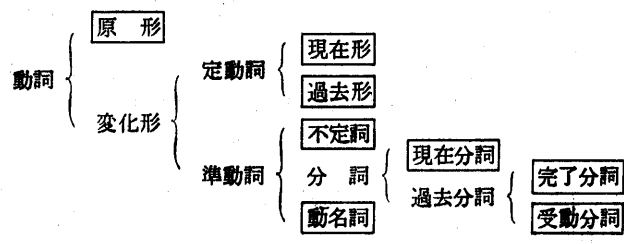
名 称	組 成	品 詞
1. 動名詞構造	動名詞 + $\alpha + \beta$	[名]
2. 不定詞構造	不定詞 + $\alpha + \beta$	[名] <形> (副)
3. 分詞構造		
① 現在分詞構造	現在分詞 + $\alpha + \beta$	<形> (副)
② 過去分詞構造	完了分詞 + $\alpha + \beta$ 受動分詞 ($\alpha - \square$) + β	<形> (副) <形> (副)

<範例3.11>

表5-2 動 詞 の 変 化 形

10.3 準動詞構造を次の3種とし、その組成と品詞指定は右の表5-1のとおりとする。動詞の準動詞形各種は範例<4.21>にまとめて示す。

(文中、準動詞は——助動詞



<範例4.21>

と合併したもの(2.2)と同様に——破線による下線を施す。)

10.4 自動詞の過去分詞を完了分詞, 他動詞の過去分詞を**受動分詞**[注1]という²²⁾。完了分詞を含め他のすべての準動詞構造は**意味上の主語**——述語動詞として節を復元した場合の主部——に変動がないが, 受動分詞の場合は α のうち目的語の1つが意味上の主語となり欠落する。(文中では意味上の主語となり欠落した目的語の痕跡に Δ を標示しておく。)

[注1] 助動詞構造第2系列, 範例<4.22>, および上記2.2の *have* に結合するいわゆる過去分詞は, 特に完了分詞といわなくてもよいとする。同様に第1系列の助動詞に結合する動詞以下も *to* のあるなしにかかわらず, ここでいう不定詞による準動詞構造とはしない²³⁾。

10.5 不定詞および分詞による準動詞構造が形容詞的に用いられるとき, その形容詞的な意味を分類して, それらを各種の相 (aspects) という[注1]。各相の一般的意味は範例<3.12>に示す²⁴⁾。

[注1] 受動分詞のときに限り態 (voice) といい, それが「be 動詞の補語」として用いられているとき特にその構造を「受動形」という。現在分詞構造が形容詞として「be 動詞の補語」になっているときに特に「進行形」という²⁵⁾。

10.6 不完全他動詞の補語に不定詞構造が用いられる場合, 不定詞は *to* を失い, 形容詞的とする²⁶⁾。

10.7 準動詞構造はその準動詞を述語動詞とする節に対応させることができる。またそれが分詞構造のとき後者の主部にあたる名詞要素を5.6によって副詞要素として前頭に付加することができる[注1]。

[注1] 上記10.4のいう「意味上の主語」を文中に明示することである。分詞構造を副詞的に用いるとき特に「分詞構文」という。

22) 「過去分詞」という用語は動詞の変化形をいうためにのみ必要であり, 動名詞と現在分詞も現実には同形異義にすぎない。

23) いずれもそれらの動詞形は助動詞と合体して述語動詞になっているからであるとする。

24) たとえば, 動詞に由来する形容詞として, 不定詞には未然, 潜勢, 想定, 抽象などの相を, 現在分詞には現然, 具現, 反復, 継続, 進行などの相を, 完了分詞には已然, 完了, 結果, 経験などの相を担わせる。

25) これにならうていえば「be 動詞の形容詞補語」として不定詞構造が用いられた場合は「予定形」などの名称で呼ぶべきであろう。

26) 現実英語ではこの構造において共起性の高い例では, *to* を失った動詞が目的語の前に移動し, 助動詞と原形の結合に似た形式になることすらある。不完全他動詞の一種の助動詞化とも考えられよう。

10.8 不定詞以外の準動詞構造がその α のあるいは β を伴わぬときはその品詞の単語と同等に扱われることがある。

11.0 変形・還元

11.1 上記(1～10)により表現は分節をもった文単位で自立し、しかも任意の変換[注1]による同義異形を選ぶことができる。

[注1] 一定の手続きによって明示的かつ可逆的に——前後無関係でなく——1つの組成が部分的にあるいは全体的に統語法上の同価の他の組成に変わること。

11.2 各種の要素が分節を経て文を構成する途次において、表現の要請から各種の「変換」をすることが許される。その手続きを変形といい、変形後も所属する文型は移らない²⁷⁾。

11.3 与えられた表現を分節し、文としてその文型を同定する途次において、上記の変形手続きを逆にたどるときその手続きを還元という。還元された文は5文型のいずれかとなる。

11.4 一つの文は分節を経て任意の変形により各種の表現を作る。また、一つの表現は一定の還元手続きにより、分節を経て必然的な文に帰着する。

11.5 変形・還元の手続きを以下に列挙する。便宜的に主として生成過程からの記述すなわち変形手続きとして示し、還元はその逆の手続きとして特に明文化しない。

11.6 等位接続詞(6.31)により自立した2つ以上の文を接続できる。それぞれの文は接続・分離によってその意味の構成に変化を起さない[注1]。(文中では|で左右に振りわけの。)

[注1] いわゆる「付加疑問」もこの一種とする。

11.7 文には他の文あるいはその一部を挿入[注1]し、付加し、併列させることができる。挿入された部分は了解される限りにおいて文型には影響を及ぼさない。(文中では \backslash \int

27) ここでいう「変形」は「閉ざされた系」として、所与・既知の「教えるべきとする英語」の統語法の一部であり、統語法が容認する諸変形の生成する同義異形の表現を際限なく、しかも循環的に可能とする運用規定である。一般のいわゆる「変形規則」が仮説であるのに対し、ここでいう変形規則は既定事実として教え学ばれるべきものとする。

で示す。)

[注1] 「静歩」的な表現として挿入あるいは後置される *I think, It appears* 等をあえて主節としない。

11.8 文中で同種の事項を羅列・列挙することが出来る。また一つの事項を喚言して表出することも出来る²⁸⁾。いずれの場合も単一の項目・事項として処理できる。

11.9 文の一部は了解される限りにおいて省略できる。省略[注1]された部分は明示的・可逆的に復元できる。省略には一定の規準があり範列<1.22>に示す。(文中では省略の痕跡を↑で示す。)

[注1] 省略とは表現の要請により統語上必要な部分を了解を予定して意図的に欠落させることとし、表現を途中で断念した未完結とは区別する。

12.0 文型内の分節の順序は範列<1.22>の示す規準によって変動させることができる。これを到置という。到置された表現はその到置を復元した文型とする。

12.1 表現の一部を一定の形式により他の単語や句あるいは節で換言し、代理し、指示[注1]させることができる。これらは相互に同格として処理され、同格の両項は分節としては同一物とする。(文中では両項を下線↑——↑で結び示す。)

[注1] 代名詞(3.3)が表現内の部分を文内で指示、代理すること、またいわゆる「強調構文」(extra-position)などを構成することを認める。

12.2 文の部分を文外の表現の一部で充たすことができる。これを引用(3.15)といい、その都度そのことを標示する必要がある。引用部は言語外のものもよい。また表現の一部そのものを、文中で、そこに限り自らの意味とするときも一種の引用とする²⁹⁾。

12.3 すでに言及されたとおり(9.0以下)文の要素に別の文——従属節——を重層的に包含できる³⁰⁾。

28) たとえばいわゆる「非制限的關係代名詞」などが先行する等位節の内容を指示・代理すること等、またいわゆる「強調構文」で補語が必ずしも名詞句もしくは形容詞的でないことも許されることなどをいう。

29) “?” is a question mark. あるいは“N. Y.” is the short for “New York”. などの用法、表現をいう。

30) いわゆる「埋め込み」操作は一般的な統語法の一つとして導入してあるが(1の9.0~9.4), 他面ここでいう変形の一つであることを当然とする。ただしすべての表現が基本文型——しかもその分節がいずれも1単語であるような——から変形により派生するとは必ずしもしない。

12.4 表現のその都度の意図・効果の傾向・種類によって文をいわゆる平叙文から疑問文、命令文、感嘆文に変形(1.9)できる。文の表現と組成——主に語順——はこれによって変わるが、文型と意味は変わらないとする。これらは相互に、明示的に変形、還元できる。（命令文を感嘆文と区別する必要があるれば文尾に！を用いる。）

13.0 許容事項・慣用

13.1 文が成立しているにもかかわらず組成が多義的であり、意味がそのままそこでは不確定(5.4)、不明確な表現におわっていることはあり得るとする。そのような文を不充分[注1]な表現であるという。

[注1] 「未完結」(11.9)な表現、あるいはいわゆる統語上の「非文」、すなわちここでいう「不成立」(1.5)の文表現と区別する。また、表現の内容が現実の意味として真であるか偽であるか等意味論上の「非文」とも区別する³¹⁾。

13.2 文として、あるいはその部分として統語上不成立ないし不整合な組成を、それにもかかわらず有効な表現ないし統語法として個別に容認するばあい[注1]、それらを慣用(1)とする。その組成と、対応する一般的意味とを範列に掲載する(表6)。

[注1] 頻度の高い連語——いわゆる「慣用句」・「熟語」——とは区別する。

13.3 慣用は一般化が周延すれば、その統語法における上位規定と矛盾し、あるいはそれを相殺しない限り、後者の下位規定として組み込むことができる。

13.4 特定の文、語群あるいは単語の当然表現・伝達する意味・内容が現実の英語ではそれらに限り別の意味・内容を表現し、あるいは別の統語的、文法的機能をもっていることをあらかじめ認め[注1]、慣用(2)として相当する表現とともに上記範列にあわせ掲載する(表6)³²⁾。

[注1] その都度の意図的あるいは偶然の効果や含意とは区別する。

31) 統語論として意味論との区画を明確にした。たとえば、意味上いわゆる「場所格」を必要とするという理由で「副詞要素を補語とする完全自動詞」たとえば *live* などを一動詞型として独立させ、あるいは「授与動詞」の第2目的語分節を副詞分節として読み代え、文型としないなどのことを避けた。また、意味から環流される統語的諸徴候——たとえば動詞の \pm factive とある形態との共起・不共起等——も当面は意味上の制約であり、その点での不都合があっても文の成立、不成立にかかわらないとする。

32) 生活慣習上の常套句、固定した比喩表現、迂言ないし短絡表現等との境界は連続的であり、文化的、風俗的な現実英語への近似度は教育的配慮にかかることとする。ただし、ここでは統語的な逸脱、不整合を容認する点を「慣用」とするのでおのずから限界がある。

表 6 範 列 一 慣 用

PARADIGM for Idioms and Idiomatic Expressions

Part I structural Idioms

1.0 Omissions

1.1 Syntactic elements of sentence omitted

(I) thank you, Beg your pardon, Mind you, ...
 (It is) no wonder that—, (There is) no wonder if—, ...
 I see (what you have said), know, understand, ...
 What (is it) for? What (is there) about it?

1.2 Syntactic elements of subordinate clauses

if (it) you please, ...
 if (it is) so, not, ...
 If (there is) any, at all, ...
 as (it is) if—, as (it is) though..., ...
 as (it is) to—, as (it is) for—, ...
 until (it is) recently, until (it is) late, ...before long...
 It is I (who am) speaking..., in which (we are) to live

1.3 Connective elements between subordinate and main clause

(though it is) strange to say...
 〇had he ever come..., 〇be it ever so humble...
 〇young as he was..., 〇young that he was..., ...
 〇the more—the less..., no less—, no sooner—, ...
 〇irrespective of—, regardless of—, notwithstanding—, due to—, thanks to—, ...

1.4 Grammatical elements

see (whatever seen), read (whatever written), drink (whatever bevrag)...
 sing (song), dig (hole), dance (waltz), ...

1.5 Reflective objects

verbs	object	objective complement
get		out, up, down, ... in, on, through, ...
	-self	along with—, across with—, out of—, ...
make		mad, ready, old, better, ...
keep		at home, on a bus, in contact, ... here, there, nowhere, ...
turn		going, starving, ...
...		caught, rid of—, tired of—, ...

1.6 Determiners, number reflections

go to 〇bed〇, be at 〇home, in 〇order to—, in 〇front of—, in 〇time, in 〇place, ...
 at 〇least〇, at 〇last〇, in 〇short〇, at 〇large〇, by 〇large〇, ...
 all of a sudden〇, of late〇, ...

1.7 Prepositions

〇today, yesterday, ... / from today, since yesterday, ...
 〇now, then, there, here, ... / from now, since then...
 〇once, three times, ... / for once, for three times, ...
 〇a lot, a great deal, a bit, a little bit, ...
 〇a few〇, ...
 5¢ 〇a piece, 3 hours 〇a week, ...
 〇one by one, 〇day to day, 〇hand to mouth, / from day to day, ...
 〇the way we do it, ...

2.0 Addition

2.1 Quasi-subject

He, being there, ..., *weather* permitting, ...

- 2.2 Quasi-object
live *a happy life*, smile *a welcome*, ...
behave *oneself*, overstay *oneself*, ...
- 2.3 Quasi-complement
stand *slient*, come *close*, marry *young*, die *a prisoner*, ...
cry *oneself hoarse*, wash it *clean*,
- 2.4 Indefinite extension
and so on, and so forth, and what not, ...
- 2.5 Symbols
i. e., e. g., viz., sic., pace. ...
- 3.0 Derivations and conversions
- 3.1 subordinate conjunctions from other elements
given, provided, granted, except...
say, let alone, suppose, ...
once, now that, no matter, ...
like, before, after, ...
- 3.2 prepositions from other elements
as, since, than, except, until, ...
like, near, ...
worth, inside, outside, ...
- 4.0 Inversions
- 4.1 articles
such *a* book, all *the* people, what *a* tall man, ...
- 4.2 prepositions
the world *over*, year *around*, there *about*, ...
- 4.3 inverted object with preposition added
let go *of*—, make light *of*—
- 5.0 Failing correspondence
- 5.1 between question and answer forms
- | <u>question form</u> | <u>answer form</u> |
|------------------------------|---|
| What do you do? | I work (viz. I do <u>working</u>) |
| What colour is this? | It is yellow (viz. <u>yellow</u> colour) |
| Of what colour is this book? | It is yellow (viz. <u>of yellow</u>) |
| Which is better, A or B? | A is better. |
| What do you think of that? | I think that A is B. etc. (viz. I think <u>this of that</u>) |
| What evidence have you? | I have the evidence that A is B. (viz. <u>that evidence</u>) |
| What fact do you know? | I know that A is B. (viz. <u>that fact</u>) |
| What fear have you? | I have the fear that A is B. (viz. I have <u>that fear</u>) |
| How are you glad? | I am so glad that A is B. (viz. I am <u>very glad</u>) |
| Why are you glad? | I am glad that A is B. (viz. I am glad <u>because...</u>) |
| Why did you do it? | I did it so that A is B. (viz. I did it <u>because...</u>) |
| What do you agree? | I agree that A is B. (viz. I agree <u>that</u>) |
- 5.2 unmatching indicative reference
He is *rich*.—I am not that.
He is *very* happy.—I am not that happy.
- 5.3 unrecoverable ellipses
I like him well.—So do I (him).
I give him books.—So do I (him) (them).
I get better.—I get better than I am (good) now.
I had better go.—I had better (to) go.
I am more than delighted.—I am more (?) than I am delighted.
- 6.0 Set collocations

- 6.1 coordinate conjunctions
 either—or, neither—nor, both—and, ...
- 6.2 coordinate objects
 each other, one another, ...
- 6.3 adverb-conjunction links
 rather than, so as, so that, more than, other than, ...
- 6.4 adverb-prepositions links
 out of, on to, ...
- 6.5 verbal phrases
 have got (emphatic colloquial of have)
 have got to—(emphatic colloquial of have to)
- 7.0 Ankylosis
 instead, because (viz. in stead, by cause, ...)
 maybe, insofar, nowadays, (viz. may be, in so far, now a days...)
- 8.0 Fractions
 sort of, kind of, (viz. somewhat,)
 though, (not as conjunction between clauses, but as indefinite ending)
 by and by, so much so, ...
 upside down, inside out, ...
- 9.0 Retained prepositions without noun, etc.
 I am looked at, to be looked at, to be looked down upon, ...
 rules to live by, rules lived by, ...
 I did not mean to—, told you not to—, ...
 I am taken care of, made a fool of, ...
- 10.0 Unexplainables
 a few things, many a thing, ...
 for the time being, ...
 by and large, ...

PART II Semantic Idioms

- 1. Verbs
 going to—(go→tend), come to—(come→become), ...
 stop to—(stop in order to—, viz. stop doing something), ...
 be to blame (for somebody to blame the person, not that he is going to blame somebody)
 be used to—(frequently appropriated for some performance or thing), ...
- 2. Adverbs
 about to—(about→ready), what to—, (what→things)
- 3. Interjections from imperative verbs
 look, come, come on, ...
- 4. Interjections from adverbs
 now, here, there, well, ...
- 5. Quantitative qualifications
 a quantity of—, two glasses of—(viz. some water, some wine,) ...
- 6. Genitive pronouns
 a friend of mine (viz. a friend of my friend), ...
- 7. Appositive phrase with 'of'
 that fool of him did it, man of his calibre..., ...
- 8. Prepositional phrase with 'with' and 'without'
 with his hand in his pocket, ...without him attending, ...
- 9. Sentences as interjections
 I beg your pardon, How do you do? ...
 You, bet. Darn it, Damn it, ...
 Let us go. ...
 Here you are. That is a boy, ...

13.5 上記すべてにかかわらず、ここで示した統語法自体の不備・不整合、限界などのため、および、不確定・不十分な組成に起因する矛盾などが発生し得ることは当然とし、それらがこの統語法の範囲内である限りは了解し容認することとする³³⁾。

第2章 意味構成法

1. ここでいう意味とは「文の意味」すなわち言語が表現・伝達する内容[注1]のうち文[注2]でなされるものをいう¹⁾。

[注1] 言語で表現・伝達する内容は必ずしも「文の意味」ではない。

[注2] 第1章で規定した組成に合致した音形による表現・伝達の手続きをいう。

2. 文の意味は表現・伝達の都度個有[注1]かつ有効[注2]であるとする。

[注1] 同一の意味が同時に異った2つ以上の文で表現・伝達され、あるいは1つの文が同時に2つ以上の異った意味を表現・伝達することはない。

[注2] 文が形式上成立している限りにおいて表現は有効であり、表現された内容と理解された内容は同一であるとする。ただし表現として意味が不十分なこと、あるいは理解不十分なことはあり得る。また、表現の効果はその都度表現内外の環境に依存する。

3. 文の意味は文とともに自立する。文の意味は、文外の表現・環境に依存し、あるいはそれらに影響を与えない[注1]。

[注1] 文が相互に貫入（第1章の3.6—以下1の3.6と記す）しないと同様にその意味も貫入し得ない。

4. 2つ以上の文が1つの表現をなしても、その結合は各文の意味の合計以上とはならない(11.6)。その結合がそれ以上の表現をしても、それは意味として各文に還元されない[注1]。

[注1] 表現はすべて1つの文でなされるとは限らない。

5. 文の意味は明示的である。一つの文はその意味に無関係な部分を含まず、意味を構成する部分、組成のすべてを具える。

6. 文の意味は構造をもつ。文の意味は明示的かつ可逆的にその統語的な分節（1の1.2）に対応して分割され、分脈（1の1.7）によって統合される[注1]。

33) 本論が教育のための模式的 (simulated) な規範文法であるという原則により当然のこととする。現実英語への接近は下位規則の導入により果される——加算的に延長線上加えられることはない。

1) ここではいわゆる「意味の意味」を定義する代りに、意味を要素と組合せとに分担させてその構成の手続きを示す。この手続きによって実現するものを意味とする。

[注1] あらゆる文の意味は5種の文脈のいずれかに収斂され、伝達される。

7. 文脈は各文型に対応させて明文化(表1)されているほかに、動詞にそれぞれの意味として担わせてある(1の2.4)²⁾。

8. 文脈を構成する各分節の意味[注1]はそれぞれの組成が予定している意味の合計である[注2]。

[注1] 以下文の各部分に分担される意味のことという。

[注2] 指示通りに各要素に与えられた意味を構成して行けば必然的に文脈に収斂され文の意味に到達する。

9. 文脈を構成する各分節の意味はその組成の構造的——統語的——意味と、その要素それぞれの担っている意味[注1]によって構成される。

[注1] 語彙目録に記入されている各単語の意味をいう。

10. 意味の最小かつ端末の単位は、単語が担う。単語の意味はその個別的な意味[注1]と、類別的な意味[注2]との合計である。有限群の単語はその意味の確定・特定のためその都度了解(1の2.1)[注3]を必要とするので「一般的意味」という。

[注1] その単語の属す最下位・端末分類の諸単語間で弁別的・示差的な意味。

[注2] その単語の属す上層の分類・分岐に記入された中間的意味の総計。

[注3] その都度文外の事情を考慮してそれらを確定し、特定することを了解という。(既出)

11. 文全体あるいはその部分が意味の不確定、多義、不充分、含蓄、矛盾等を含んだまま成立していることもある[注1]。

[注1] 文が常に表現として完全であるとは限らない。不完全な表現は特に了解されなければ、そのままにおわる。

12. 了解された事項を含み、表現の都度の言語外的な事情、心理的な経緯、前後の文の記憶と予見等は文中に明示されない限り文の意味とはしない[注1]。

2) ここでは文の意味の源泉があらかじめ動詞に組みこんであるので、部分の総和が全体となり、「文の意味」を部分の意味の合計を超えたものとしてその都度「創造」され「直観」されるべきものとはしない。

また述語動詞に文脈を担わせることにより、「格」に関する文法問題をあらかじめ回避する。

[注1] 文は自らが意味すること以上を表現できるかもしれないが、それを意味することはできない³⁾。

13. 各種の変形操作(1の11.0以下)による同義異形の文はその操作によって意味に変化はおこさないが、表現としての効果に異同があるとする。

14. 各種慣用(1の13.0以下)の意味は個別に分類・登録し(表6)、必要ならば成立の由来・用法等を付すことができる。

第3章 単語、語彙、語彙目録、範列

1. 上述したように(2の10)ここでいう単語は音形、統語、意味の合体物として表現における端末かつ最小の単位である[注1]。

[注1] この統語法では単語の内部の事情は一応感知しないとする。

2. 単語はすべてそれぞれの意味とともに音形によって登録され⁴⁾、登録されている単語の全集合を統語法(第1章)および意味構成法(第2章)に対応する素材として一括して**語彙**という。

3. 語彙は統語法の各指定に対応する各層の下位区分——主として品詞別——に単語を縦断的に分類し、以下各分岐ごとに分類項目を記入し、端末の単語とその意味に達する**語彙目録**(lexicon)の形に編集されている⁵⁾。

4. 語彙は有限群と無限群とに2極化され、語彙目録では横断的に区画されている(表4)。前者には原則として任意に新設・追加あるいは廃棄できない語群[注1]が属し、後者にはその他の任意に新設・登録がゆるされるところの単語が収録されている[注2]。

[注1] いわゆる「機能語」あるいは「文法語」といわれる語群であり、意味は一般的で表現内の論理関係、統語関係を支える。

[注2] いわゆる「意味語」といわれる語群で、これらの「辞書的な意味」、すなわち文中で意味する予定の内容は表現の都度了解を得る必要なく、あらかじめ分類的に特定されている⁶⁾。

3) その都度の比喩的な表現、逆説的表現、意図的な省略、多義、曖昧などはここでいう「文の意味」としない。

1) ここではいわゆる「単語」を定義することをせず、単語として登録されていることをもって示し与える。

2) 語彙目録は現実特定の表の姿で与えられる。ここでは概念としてのいわゆる「辞書」ではない。

3) 有限群、無限群は語彙を2分割するのではないので2分極という(7.1)。

5. 上記(2の10)で言及したように、単語の意味はこの語彙目録の区画に沿い、下位区分の分岐点をたどってその端末である単語に達するまでの統語的、類別的な意味の合計と、自らの直近同類項間での弁別・示差の意味の合体であり、端末の単語にはそのような個別の意味が記入されている。

6. 単語間の同形異義、異形同義などは出来る限り排除するか、必要な弁別の標示を施す⁴⁾。

7. 2単語以上の組合せによる仕意の造語はその都度単語として扱ってよいがその標示を必要とし(文中ハイフオンで連結しておく等)特に意味が自明でないものには説明等も加え、了解を必要とする⁵⁾。

8. 単語の分類にまたがる転用は範列<4.1>で示す形式に限り文中で標示して行うことができる。

9. 語彙目録には上記2方向の区分のほかに、部分的あるいは付加的な分類や記述を多元的に加え、単語間の各種の関係を明示し、これらを各種の範列[注1]として語彙目録の関係箇所配し、あるいは一括して示すことができる⁶⁾。

[注1] 各単語自体のみならず、同一分類の集合全体が予想する文中での変化——いわゆる「活用形」、「数」、「人称」その他、たとえば動詞の場合、±stative、また無生物主語との共起の可否等の文法事項を示す。また一分類の他分類への派生の手続き、他分類との結合の様式なども、それらによる意味の変化を担わせて語彙目録に収録する。

10. 単語内の語源上あるいは音形上の特徴などである範囲で一般化しうるものについて[注1]も範列によって示し、説明することもできる⁷⁾。

[注1] 語源、接辞等の分類・結合の状況など、また必要あれば綴字法などにも触れることができる。ただし、ここという統語法には入らない。

4) 自然語彙のうち基礎的でかつ頻度の高い単語の間でこのような例が多いことが現実に学習上の困難の一つになっている。

5) 単語の複合によって造語し、その意味もその都度のことに限らず、その構成物の意味の合計、あるいはそれ以上のものとするためには「造語の文法」をあらかじめ用意する必要がある。

6) 一般に「文法」といわれるものの大部分はこの種の諸事情を随所に示し、あるいは編集したものであるといえる。

7) 範列は語彙部門——その文法その他の事象を含む——と統語部門との界面でもある。

11. このほか語彙目録には表現のため意味から個別の単語を検索するための索引 (thesaurus), アルファベット見出しによる索引などを付すことが必要である。

12. 語彙目録に登録すべき単語は, 学習の目的, 目標に合わせてその数と種類を決定し, その分類区画も最少限のもの (1 の 7.1) から精密なものへと段階をもって各種類作の必要がある。

13. 言及した各種範列は音形, 統語, 意味, 語彙の相互関係をそれぞれの関係箇所でも元的に標示し, 部分的な手続きではあるが, すべてこの統語法から演繹されその構成要素として相互に関係しているべきものとする。

14. 各種の範列を一括してその統語法内での相互関係をある程度明示するように図示する (表 7) [注 1]⁸⁾。

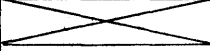
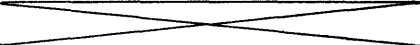
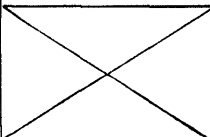
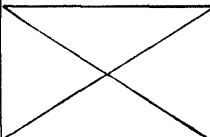
[注 1] 具体的な下位記述は既述以外のものは略した。ただし表 8 に一例をあげる。

表 7 範 列 体 系

1.0 表現	4.0 単語・語彙・語彙目録
1.1 表現の種類, 効果, 相互関係 (以下「相関」)	4.1 品詞の種類, 変形, 意味, 相関 (派生) (表 4)
1.2 変形・還元規則	4.21 動詞の種類, 音形 (変化), 意味, 相関 (表 5-2)
1.21 文の連接・分離	4.22 助動詞構造の種類, 組成, 音形, 意味, 相関 (表 2)
1.22 文内部分の変形・還元	4.31 名詞の種類, 音形 (変化), 意味, 相関
2.0 文・節	4.32 代名詞の種類, 音形 (変化), 意味, 相関
2.1 文型, 文脈の種類, 効果, 相関 (表 1, 3)	4.41 形容詞の種類, 変形 (変化), 意味, 相関
2.2 節の種類, 組成, 意味, 相関	4.42 限定詞の種類, 音形 (変化), 意味, 相関
2.21 従属節の種類, 組成, 意味, 相関	4.51 副詞の種類, 音形 (変化), 意味, 相関
2.22 関係節の種類, 組成, 意味, 相関	4.52 感嘆詞の種類, 音形, 意味, 相関
3.0 要素・分節	4.6 前置詞の種類, 音形, 意味, 相関
3.1 分節の種類, 組成, 意味, 相関 (表 8)	4.7 接統詞 (関係詞) の種類, 音形, 意味, 相関
3.11 準動詞構造の種類, 組成, 意味, 相関 (表 5-1)	5.0 慣用
3.12 相の種類, 組成, 意味	5.1 慣用 1 の種類, 音形, 意味, 相関 (表 6-1)
3.2 分節・要素間の修飾関係相関	5.2 慣用 2 の種類, 音形, 意味, 相関 (表 6-2)

8) 現実の語彙目録の作成について意味の記入をのぞけば各品詞毎にある程度行って見たが, 満足すべき, 現実的なものにはなっていない。上記『論集』第 27 集以下参照。

表8 分節・要素の組成と相關

		名 詞 要 素	形 容 詞 要 素	副 詞 要 素	詞 ・ 辞	
單語	有 限 群	代名詞(主・目) 再帰代名詞(主・目) 不定代名詞 關係代名詞 疑問代名詞	限定詞(冠詞) 代名詞(所有) 指示代名詞 数詞 疑問(形容)詞	無比較副詞各種 關係副詞 疑問副詞	前 置 詞 前置詞各種	接 統 詞 等位接統詞 從屬接統詞 關係詞
	無 限 群	一般名詞各種	一般形容詞各種	一般副詞各種 感嘆詞各種		
句	文 法 句	名詞連接 形容詞要素による被修飾句	形容詞連接 副詞要素による被修飾句	副詞連接 (他の副詞要素による被修飾句)		
	統 語 句		前 置 詞 句			
動名詞構造(句)						
不 定 詞 構 造 (句)						
		現在分詞構造(句)				
準動詞構造	統 語 句		完了分詞構造(句)			
			受動分詞構造(句)			
節		名詞節 關係代名詞節	(形容詞節) 關係代名詞節	副詞節 關係副詞節		

<範列3.1. 3.11>

<範列3.1, 3.11>